

リサナメント * TAKARAZUKA 通信

NO.13 2007 / 12 / 18

いつまでも暑さの残るおかしな秋のまま、立冬をむかえ、今年の紅葉はいまひとつ。そう思っていたのに、11月下旬の急激な冷え込みで、息を呑むほど鮮やかな紅葉浄土となりました！予測とはつかないものですね。「塞翁が馬」の例えどおり、人生もまた同じ。こころして日々を楽しく——そんな気構えを、肩肘張らない自然体で持ちつづけられたらいいなと思っています。今年一年ありがとうございました。そして、来年もよろしく。

🎪 小講演会をひらきました。

10月28日、いまい内科クリニック待合室にて、久しぶりの講演の会をひらきました。

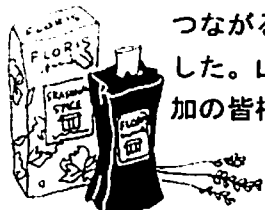
テーマは「高齢者介護の現状」。講師に「おおきな輪」代表の山田和子さんをお迎えし、コメンテーターは、関西大学政策創造学部教授、一圓光彌さんをお願いしました。

●山田さんは、想像していた以上にパワフルな方、豊富な資料とレジュメを用意の上で、現場で奮闘する人間としての熱い語りを展開してくださいました。具体的には、介護保険制度の矛盾や問題点、ケアマネジャーの立場の不安定さなどを説明、そのような中でポリシーとしている「邂逅」（出会うべくして出会った出会い）と「桃李」（桃李の木の下には、誘われるように皆が集まってくる）という言葉のもと、今後進むべき方向を次のように示唆してくださいました。

- ・ケアマネジャーの仕事の中にソーシャルワークの部分を入れる。
- ・地域の全員が担い手との認識のもと、NPO やボランティアを含めたインフォーマルサービスの充実。
- ・医療機関が居住空間（たとえば、高齢者賃貸住宅）を提供。
- ・高齢者自身が収入を得られるコミュニティビジネスなど、収入源と居場所の確保。
- ・相談機能の充実

●コメンテーターの一圓先生からは、ケアマネジャーの独立性を高める必要性の提案、また英国の高齢者介護の現状のお話を頂戴しました。聴衆のひとりとして、こんなに身を挺して、熱い心で高齢者介護を考えてくださる方がいらっしゃるの感動でした。ただ、遠くない将来にこの制度のお世話になる可能性のある身としては、もう少しハウツーに関する部分も知りたかったような気がしました。また、

リサナメントの活動としては、こうした時代の流れのなかで、何かお手伝いできることはないかと考えるヒントをいただきました。「邂逅」と「桃李」という言葉がリサナメントの活動のめざすものにつながると思えたのも、うれしいことでした。山田さん、一圓先生、そしてご参加の皆様、ありがとうございました。



🎪 季節の句

戯曲よむ冬夜の食器浸けしまま

・・・杉田 久女

虚子が女性のために設けた「ホトトギス」台所雑詠欄で、その枠を破るほどの境地を切り開いた久女。多くの人生が詰まった戯曲を読んで、彼女は何を夢見ていたのだろう。茶碗や皿の沈む冷たい冬の水が、この時代の女性の桎梏を象徴しているようでもあり、それを浸けたままの読書に、彼女の“抗う生き方”が見えるよう。